

令和 7 年 6 月 9 日現在

機関番号：17102

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）

研究期間：2019～2024

課題番号：19KK0004

研究課題名（和文）文理統合型・帝国大学史研究の試み 「内/外地」演習林の比較史

研究課題名（英文）Comparative study of ex-Imperial University forests' history as Integration of human and natural science

研究代表者

永島 広紀（NAGASHIMA, Hiroki）

九州大学・韓国研究センター・教授

研究者番号：50315181

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,000,000円

研究成果の概要（和文）：「旧帝大演習林」をめぐる本共同研究は、国内外の研究機関との双方向による学術交流を行うに際して、好個の素材であることは贅言を要しない。すなわち、日本側にとってはすでに喪失した旧演習林の今日的な現況、あるいは過去に蓄積された各種のデータとの整合性を現地において調査・確認することが可能である。一方、韓国や台湾にとっては、現地には残りがたい大学本部作成の公文書や標本サンプル、あるいは戦争・内乱で焼失した1945年以前の記録を一定程度において復元しうることを意味するものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「演習林」を通じて学問領域を横断的に、かつ大学・部局をも横断的に、しかも最終的には、各「帝国大学」と「内/外地演習林」との関係史を考究することによって、大学と演習林の史的な連環を繙く作業となった。演習林は大学組織としては<準部局>的存在し、また広大な敷地と研究・実習用標本、そして植林/伐採にまつわる現業部門をも有した重疊的な組織である。本研究は演習林のこうした組織的特性から、狭義の「大学史」では取り扱いづらい「大学史料アーカイブ」「技術史/技術官僚論」「水環境と地域史」「山林生態学」「災害/災害予防学」という文理両系に跨る各領域を統合した、新たな研究の地平を開かんとしたものであった。

研究成果の概要（英文）：This collaborative research on the 'Former Imperial University Forest' is an excellent material for conducting bilateral academic exchanges with research institutions both domestically and internationally, which goes without saying. In other words, for Japan, it is possible to investigate and confirm the current state of the former training forest that has already been lost, or the consistency with various accumulated data from the past, on-site. On the other hand, for South Korea and Taiwan, it means that it is possible to partially restore public documents, specimen samples created by university headquarters, or records lost in wars and civil conflicts before 1945.

研究分野：歴史学

キーワード：演習林 旧外地 敵産処分 水原高等農林学校 傍系入学 台北帝国大学理農学部 台中高等農林学校 ポゴール植物園

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の着想におけるその直接的な発端には、九州大学農学部附属演習林が 2013 年に編集・刊行した『百年史』が位置づけられる。九州帝国大学における第 3 番目の学部として 1919 年に設置された農学部であるが、実は学部設置以前である 1912 年の段階で、しかも国内に先駆けて朝鮮総督府(当時の総督は寺内正毅)から「基本財産林」として後年の演習林用の敷地が無償で長期貸与されていた沿革を有する。

戦後、九州大学をはじめとする旧帝大演習林は、現地政権の下で接収・再利用されていくが、とりわけ朝鮮半島におかれた旧演習林にまつわる施設や記録類は朝鮮戦争(1950~53)の戦火によって失われており、現地の研究者たちにとっては日本側に残る記録に関して非常な関心をもってきていた。また、日本側の研究者としても戦後の観測データを欲するという、自然に相互補完的な関係を持つに至っていた。そして、これは外地演習林設置の嚆矢である台湾でも同様であった。しかも、ソヴィエト連邦崩壊後のロシア連邦では歴史記録の公開が進み、旧樺太庁関係文書もサハリンの公文書館で閲覧が可能な段階に至っている。

さて、九州大学の大学文書館は上記の『百年史』編纂に多くの寄与をなしたことから演習林との密な関係が構築され、また同大学の韓国研究センターに外地の帝国大学を研究テーマとする研究者が着任したことも相俟って、部局の壁を越え、また「大学演習林協議会」のネットワークを活かした他大学の演習林関係者との連絡にも繋がった。

そして、この動きは、九州大学の学内での競争的資金(国外有力大学からの研究者招聘費)である「Progress100」の採択を受け、北米の環境史研究者、ソウル大および台湾大の林学/地質学研究者を招くことによって、国内外の研究者を縦横に組織しての共同研究が可能となっている。

2. 研究の目的

本研究の学術的な背景には、課題名として掲げた「文理統合型・帝国大学史研究の試み 「内/外地」演習林の比較史」に示されるように文系・理系に跨る、しかし従来の研究では連関性を欠きがちであった問題群を複合的かつ横断的に考究し、またそこから生じる「帝国大学」とは、そして「大学演習林」とはという根源的な「問い」に再び還元しうる研究モデルを構築していくことを模索することが存する。

3. 研究の方法

「大学史からの視点」帝大演習林とは、単なる実験や学生の実習の場ではなく、「準部局」としての役割、つまり大学全体の財政収支・財産保持への寄与が期待される存在であった。特に樺太では製紙会社へのパルプ材供給源となり、多額の収益を大学にもたらした。また、時を経ての話とはなるが、旧帝大時代の資産を受け継いだ国立大学が法人化された後においては、今度は財政整理とともにフィールド科学系組織への改組対象ともなっている。まさに「演習林」という言わば定点観測の場から改めて大学史を繙いていく作業である。

「大学資料アーカイヴからの視点」関係資料の収集・整理・保存・公開(あるいは非公開も含めて)は、本研究の骨子をなすものであり、日本国内に残る資料と国外に残る資料とを相互に連結し、かつ補完する作業に他ならない。かつ、画像資料(写真・図面等)の保存、あるいは修復とデジタル化も、活字資料に止まらない演習林資料の特性である。また、遺族を主とする関係者からの聞き取り、そして各大学に残る帝大時代からの建築物・遺構を把握・マッピングすることもアーカイヴ作業として必須のものである。

「技術史/技術官僚論からの視点」植林と造林、営林、伐採という一連の円環的な作業は、とりわけ内地においては帝室林野局・御料林、外地においては現地の総督府権力や旧王家(李王職)との協力関係、あるいは競合と葛藤を生み出すことになった。また、砂防工事、土壌の改良と管理、水質保全と水源涵養といった技術試験の実施過程、技術者の人事と配置に関する立体的・構造的な把握は、やはり当該の専門研究者との協力によって実際の技術水準を踏まえることによってこそ可能となる。

「地域史からの視点」現在において「景観(里山)」の創出如何は大学演習林の生き残り策としても注目されている。そして、それはやはり地域社会との協調と葛藤をバランスよく把握する必要がある。ただし特に旧外地の演習林においては、朝鮮における「火田民(焼き畑農業を行う移動住民)」や台湾における「生蕃(現住民族)」対策は、今となってはほぼ失われた、しかしながら教訓に富む経験であった。かつ伐採・炭焼き・食用菌類の栽培・その輸送ルート・販路、という授産と雇用をめぐる地域経済との関係は今日的な課題でもある。

「環境史からの視点」気候変動に関する定点観測データに関しては、まさに 100 年以上の情報蓄積を、国内的、対外的に連結することが、本研究では可能である。また、動植物の生態系の把握と記録化に伴う人的な営為、そして近年においてはその重要性がしきりに叫ばれる災害の予防/災害からの復旧にまつわる問題群について、まずは実証史的な手法によって論点・問題点の整理がなされることになる。

4. 研究成果

(2019) 当該年度は採択の初年度、かつ年度途中での研究開始であったことにより、次年度以降における研究体制の整備に尽力した。とりわけマイクロフィルムリーダーの購入などハード面での環境が整いつつあり、また国内を中心に予備的な史料調査、および研究に関する打ち合わせを行った。ただし、令和2(2020)年に入ってから予定されていた韓国・台湾での実地調査が新型コロナウイルスの影響によって中止に追い込まれ、かつ国内での調査出張も制限されたため、資料調査に遅れが出た。

それでも令和元(2019)年10月18日には本学の農学部附属演習林・大学文書館・総合研究博物館による協力の下、本共同研究のキックオフを兼ねた国際シンポジウム「北東アジアの《緑化》と九州大学」を開催した。同催しでは「大学文書館に保存される農学部関係資料」・「農学部/総合研究博物館所蔵資料に見る金平亮三」・「九州帝国大学農学部と旧満洲・台湾・朝鮮半島」といった研究報告とともに、ソウル大学校名誉教授の玄正悟先生を招聘し、「わが父・玄信圭を語る」と題した基調講演をお願いした。また、1920年代の朝鮮半島における「植林」関係の資料調査を岩手県奥州市(斎藤実記念館)にて実施して、稀覯史料を見出すことが出来た。

次年度は初年度の遅れを取り戻すべく、ウイルス蔓延の解消を待ってから国内外における調査を再開するとともに、関係資料の収集と整理とを期すこととした。

(2020)「国際共同研究強化」に関しては全くもって「看板倒れ」の一年であった。国内外の「大学演習林」の比較研究を行うためには必須である現地踏査を新型コロナウイルスの災禍により一度も行うことが出来なかった。よって当該年度においては基本的な文献資料の収集とその整理にその多くの時間を費やすこととなった。その結果、長い発行年数を有する『京城日報』『毎日申報(新報)』の記事検索に労力を傾けた結果、少なからぬ貴重な情報を得られたのは幸いであった。また、旧水原高等農林学校関係の資料、あるいは台北帝大理農学部・台北帝大農林専門部に関する稀覯資料も入手することが出来、今後の実地調査における基礎資料の整理が進んだことは一種の「怪我の功名」であった。当該年度においては、やはり現地調査を再開できる見通しは全く立っていない(2021年4月現在)。それでも、なんとか年度の後半には台湾に赴き、台湾大学総図書館に所蔵される関係資料の調査を行うべく事前の折衝を行っている。また、これまでの調査成果、および文献資料の分析を通じたオンラインでの国際ワークショップを開催するとともに、研究期間の後半に向けた作業工程の見直しと成果の公表について調整を行う予定である。また、本年度以降は、昨年度の文献資料収集によって得ることの出来た少なからぬ分量の満洲(関東州を含む)における関係資料(大陸科学院・公主嶺農事試験場・満鉄中央試験所等)を同時に整理・分析することとした。

(2021) 当該年度も主たる研究目的である海外渡航による学術調査を全く行うことが出来なかった。ただし、オンラインという形ではあるが、共同研究を行うこととなっているソウル大学校山林科学部のメンバーとは学術的な国際集会(2021年6月22日:「第2回ソウル大学とのジョイントシンポジウム」にて農学部附属演習林・大学文書館と共同により、ソウル大学校農業生命科学大学(学術林)との間で「Role and Function of University Forests: past, present and future」分科セッションを開催)を実施することができ、はなはだささやかながらも「国際共同研究推進」の趣旨に合う本科研を遂行できたのは幸いであった。国内における調査も限定的なものに終わったものの、引続き岩手県奥州市において関係資料の整理を実施するとともに、主として東京都内の資料所蔵機関(国立国会図書館、国立公文書館、東洋文庫等)において基礎的な資料の補充に努めた。また、弊学韓国研究センター学術協力研究員の助力を得て、韓国の緑化政策推進にあたって中心的な役割を担った玄信圭(九州帝国大学農学部林学科卒・九州大学農学博士)の自叙伝を翻訳した。今後、これに補注や解題を付して刊行する予定である。また大学文書館との共同で本学農学部附属演習林関係の資料整理を引続き実施した。この中から資料価値が高いものを選別し、最終的には資料集を作成する予定である。

(2022) 当該年度は後半期に新型コロナウイルス感染症が終息の傾向を顕著に表し始めたことから、本研究の眼目である海外調査を再開できたことがまずは特筆すべき事項である。研究代表者である永島は2度にわたり韓国(ソウル・釜山・済州)にて調査を行い、また研究分担者である古賀も韓国・慶尚国立大にて調査を実施している。かつ、永島と分担者の藤岡は、総合研究博物館の三島教授の協力を得て台湾大学図書館にて、今後の研究遂行上で核となりうる資料の収集を行った。かつ、研究分担者の通堂は引続き、京城帝国大学をはじめとする関連機関に関する資料収集と整理を継続した。とりわけ、京城帝大・台北帝大・九州帝大における関係教員の人事情報を整理した結果、こうした諸機関から太平洋戦時下の「南方軍政」に派遣され、とくに旧「蘭印」(インドネシア)に「陸軍司政長官」「軍政地教授」などの身分でジャカルタ医科大学・バンドン工業大学・ボゴール植物園などに勤務した理化学系研究者の動向が「再発見」されつつあり、本科研のみならず、次なる共同研究の発展を期することが出来る重要な方向性を見出すことが出来た。なお、ソウル大学山林科学部のメンバーとは、今年度から対面での交流が復活し、9月には福岡(九州大学伊都キャンパス)での共同研究会開催に漕ぎ着けている。かつ、国外研究協力者を委嘱している台湾大学教授(林学)も九州大学(伊都地区・宮崎演習林等)を訪問し、久闊を除すとともに、今後の研究発展に関して意見交換を行った。

(2023) 当該年度は、主として収集データの整理と目録情報の入力に注力した。特にこれまでは附属演習林から大学文書館に移管された文書史料を活用してきたところに、新規に財務関係の資料が本部から大学文書館に移管され、これらを研究分担者の藤岡健太郎教授(大学文書館)を

中心として『九州帝国大学農学部附属演習林関係資料目録』として刊行されたのが特筆される。また、国内外において引続き資料調査を進めるとともに、昨年度末に台湾大学で実施した調査において撮影して入手した「台北帝国大学」関係の人事データを入力して、今後の研究において基礎となる作業を進めた。かつ、研究代表者の永島は、国内では仙台・東京・金沢・奈良・松山などで、国外（韓国）では、ソウル・清州・大邱・釜山・済州島などで資料調査を実施した。ただし、一昨年度までの積み残しも多く、作業が遅滞なく進展したとは言い難い面も多く、やむなく研究期間の延長を申請し、幸いにも許可を得ることが出来た。最終年度は、これまでの調査・研究によって明らかになってきた太平洋戦争末期における農学部（および医学部）関係者の「ジャワ（インドネシア）軍政地派遣」の実態に関して最終的な整理を行うとともに、新規に発見された『演習林月報』（1940～1943年）の翻刻と分析を通じて、所期の研究を完遂する予定である。また、すでに翻訳が終了している玄信圭博士（九州帝大卒、九州大学農学博士、ソウル大学校農科大学教授）の評伝に註を付して刊行する予定である。

（2024）大学文書館、農学部附属演習林による協力の下、さらに総合研究博物館所属の教員の参与を得て学内外に残る関係史料の再整理と目録化が進んだことにより、今後における研究の進展に裨益するところが少なくない状況もたらされた。ソウル大学校（山林科学部）および台湾大学（林学系）との研究交流が進展し、複数回にわたる韓国での調査に加え、いまだコロナ禍による渡航制限が続くなかで台湾での調査を実施し、とりわけ「台北帝国大学」時代の林学研究に関する基礎資料を収集できたことは特筆に値する。新型コロナウイルス感染症の拡大と、その予後における渡航制限の影響により実地調査こそ実現しなかったものの、九州帝国大学農学部林学科の教員が戦時の占領下にあったインドネシアに司政長官・司政官として派遣され、ポゴール植物園をはじめとする現地での調査研究に従事し、これが戦後の研究活動において陰に陽に影響をもたらした事実を、実証的に検証を行い、次なる研究課題の濫觴となりうるものとなった。特に、インドネシアのみならず旧英領マラヤ（マレーシア・シンガポール）、スマトラ島（パレンパン）などでも同様の事例が確認され、これは同時に医学部・医学専門学校関係者（特に防疫・感染症対策）など、農学とも近接する分野の研究者が深く関与したものであったことが、新たに確認された。ただし、上述の通り、国外での研究活動に大きな制約を受けた時期が長く、十全の計画遂行が未完に終わった点は極めて遺憾であった

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 永島広紀	4. 巻 22
2. 論文標題 「帝国」の大学に学んだ朝鮮人学生	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 韓国研究センター年報	6. 最初と最後の頁 71,144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤岡健太郎	4. 巻 31
2. 論文標題 書評と紹介：加藤諭著『大学アーカイブズの成立と展開』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 記録と史料	6. 最初と最後の頁 83-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永島 広紀	4. 巻 22
2. 論文標題 帝国の外地出身「科学者」たち	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学文書館紀要	6. 最初と最後の頁 2-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永島 広紀	4. 巻 21
2. 論文標題 「武断」と「文化」の狭間にあるもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 韓国研究センター年報	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永島広紀・朴必善・梁偉立	4. 巻 20
2. 論文標題 共同研究「文理統合型・帝国大学史研究の試み」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 韓国研究センター年報	6. 最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 朴必善	4. 巻 20
2. 論文標題 韓国の気候・山林とその「攪乱」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 韓国研究センター年報	6. 最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梁偉立	4. 巻 20
2. 論文標題 国立台湾大学実験林の沿革	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 韓国研究センター年報	6. 最初と最後の頁 75-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 1件/うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Shinya, Koga
2. 発表標題 Latest topics of KU Univ. Forests
3. 学会等名 3rd SNU-KYUSHU JOINT SYMPOSIUM Satellite Session (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kentaro, Fujioka
2. 発表標題 Introduction to the History of Kyushu University; new permanent exhibition open to the public
3. 学会等名 3rd SNU-KYUSHU JOINT SYMPOSIUM Satellite Session (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 永島広紀
2. 発表標題 Role and Function of University Forests: past, present and future
3. 学会等名 第2回ソウル大学とのジョイントシンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤岡健太郎
2. 発表標題 Role and Function of University Forests: past, present and future
3. 学会等名 第2回ソウル大学とのジョイントシンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永島 広紀
2. 発表標題 帝国の外れ出身「科学者」たち
3. 学会等名 第3回 広島大学文書館研究集会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 永島広紀
2. 発表標題 九州帝国大学農学部と旧満洲・台湾・朝鮮半島
3. 学会等名 国際シンポジウム「東アジアの《緑化》と九州大学（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤岡健太郎
2. 発表標題 大学文書館に所蔵される農学部関係資料
3. 学会等名 国際シンポジウム「東アジアの《緑化》と九州大学（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤岡健太郎
2. 発表標題 帝国大学と旧外地演習林 「九州帝大」の位相を中心に
3. 学会等名 韓国研究センター×大学文書館 共催 国際研究集会2024（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 永島広紀
2. 発表標題 「戦時版」日刊新聞紙では何が報じられたのか？ 「昭和19年の研究」序章
3. 学会等名 韓国研究センター×大学文書館 共催 国際研究集会2024（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 九州大学大学文書館編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 九州大学大学文書館	5. 総ページ数 141
3. 書名 九州大学大学文書館所蔵 九州帝国大学農学部附属演習林関係資料目録	

1. 著者名 永島広紀	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 思想史講義【明治篇】（分担執筆：「日韓合邦論」）	

1. 著者名 小澤 実、佐藤雄基	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 608
3. 書名 史学科の比較史（分担執筆：京城帝国大学法文学部の史学系講座とその歴史学研究 台北帝大、満洲・建 国大学との比較的視点を踏まえた考察）	

1. 著者名 山口 輝臣、福家 崇洋	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 思想史講義【明治篇】（分担執筆：「日韓合邦論」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤岡 健太郎 (FUJIOKA KENTARO) (00423575)	九州大学・大学文書館・教授 (17102)	
研究分担者	久米 朋宣 (KUME TOMONORI) (30816393)	九州大学・農学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	六反田 あゆみ(通堂あゆみ) (ROKUTANDA AYUMI) (70826370)	九州大学・韓国研究センター・学術共同研究員 (17102)	
研究分担者	古賀 信也 (KOGA SHINYA) (20215213)	九州大学・農学研究院・教授 (17102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	梁 偉立 (LIANG Wei-Li)		国立台湾大学教授
研究協力者	朴 必善 (Park Pil-sun)		ソウル大学校教授

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 北東アジアの《緑化》と九州大学	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 韓国研究センター×大学文書館 共催 国際研究集会2024	開催年 2024年～2024年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
台湾	国立台湾大学			
韓国	ソウル大学校	延世大学校		